

公営住宅建設事業(額県営住宅)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

金沢市

額新町遺跡

2014

石川県教育委員会

(公財)石川県埋蔵文化財センター

ぬか しん まち
額 新 町 遺 跡

2014

石川県教育委員会
(公財)石川県埋蔵文化財センター

例　　言

- 1 本書は額新町遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は金沢市額新町1丁目地内である。
- 3 調査原因是公営住宅建設事業（額県営住宅）であり、同事業を所管する石川県土木部建築住宅課が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は財團法人石川県埋蔵文化財センター（平成25年度より公益財團法人石川県埋蔵文化財センター）が石川県教育委員会から委託を受けて、平成23(2011)年度から平成25(2013)年度に実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書刊行である。
- 5 調査に係る費用は、石川県土木部建築住宅課が負担した。
- 6 現地調査は平成23年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者は下記のとおりである。

期　間 平成23年5月9日～同年7月5日

面　積 1,080m²

担当グループ 調査部特定事業調査グループ

担当者 和田龍介(専門員)、畠山智史(嘱託調査員)

- 7 出土品整理は平成24(2012)年度に実施し、調査部特定事業調査グループが担当した。
- 8 報告書の作成・刊行は平成25年度に実施し、調査部特定事業調査グループが担当した。執筆は和田龍介(調査部特定事業調査グループ専門員)が行った。
- 9 調査には下記の機関の協力を得た。
石川県土木部建築住宅課・同管轄課、金沢市教育委員会
- 10 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - (1)方位は座標北であり、座標は平成十四年国土交通省告示第九号の平面直角座標系第VII系（世界測地系）に準拠している。現地測量作業は、国土地理院「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震による地殻変動座標補正バラメータ」公表（平成23年10月31日）前の座標値で実施しており、補正後の座標値は第4図に示した。
 - (2)水平基準は海拔高であり、T.P.（東京湾平均海面標高）による。
 - (3)出土遺物番号は挿図と写真で対応する。

目 次

第 1 章 経 過.....	1
第 1 節 調査の経過.....	1
第 2 節 発掘・整理作業の経過.....	1
第 2 章 遺跡の位置と環境	2
第 1 節 地理的環境.....	2
第 2 節 歴史的環境.....	3
第 3 章 調査の方法と成果	4
第 1 節 調査の方法.....	4
第 2 節 層序	4
第 3 節 遺構と遺物	5
第 4 章 総 括.....	10
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 遺跡の位置	2
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第3図 調査区の位置と既往の調査	4
第4図 額新町遺跡全体図(S=1/200)	5・6
第5図 南区SB1、風倒木痕跡SX1(S=1/60)	8
第6図 その他遺構断面図(S=1/60)	9
第7図 出土遺物実測図(S=1/3)	9

第1章 経過

第1節 調査の経過

額新町遺跡の発掘調査は、石川県土木部建築住宅課が所管する公営住宅建設事業（額県営住宅）に係るものである。本調査の原因となった額県営住宅44・45号棟は昭和40年代の高度成長期に建設されたもので、県営住宅としては最も古いものに属する。石川県教育委員会事務局文化財課（以下「文化財課」）が実施する、国・県等の開発部局に対し次年度以降の土木工事等予定を照会するヒアリング「埋蔵文化財調査等に関する協議会」において、平成22年度協議会に額県営住宅建設について土木部から計画的回答があった。建設箇所は周知の埋蔵文化財包蔵地外であったが、額新町遺跡や馬替遺跡等の包蔵地が近接し、工事中の不時発見も懸念されたことから事前の分布調査が必要である旨を通知した。平成22年9月14日付土木部建築住宅課長宛の埋蔵文化財分布調査依頼により、文化財課が試掘調査を実施したところ事業範囲の一部で遺構・遺物が確認された。確認された埋蔵文化財は周知の埋蔵文化財包蔵地「額新町遺跡」であると判断された。文化財課では「石川県埋蔵文化財取扱基準」に照らし、同工事により埋蔵文化財が損壊すると判断、記録保存調査等の保護措置が必要であることを建築住宅課に伝え、協議・調整に入った。規模・構造等から地下の埋蔵文化財に影響が生じない工法をとることは困難であり、工事の実施も急がれることから、平成23年度に埋蔵文化財が損壊する範囲で記録保存調査を実施することで同課と調整を進めた。

発掘調査は、土木部建築住宅課からの依頼を受けた県教育委員会の委託事業として、財團法人石川県埋蔵文化財センターが実施した。

第2節 発掘・整理作業の経過

各年度における体制は下表のとおりである。

調査・整理体制

調査・整理体制	平成23年度(発掘調査)	平成24年度(出土品整理)	平成25年度(報告書作成・刊行)
調査期間	平成23年5月9日～7月5日	平成24年4月1日～平成25年3月31日	平成25年4月1日～平成26年3月31日
調査主体	財團法人石川県埋蔵文化財センター	財團法人石川県埋蔵文化財センター	公益財團法人石川県埋蔵文化財センター
代表	竹中 博康(理事長)	木下 公司(理事長)	木下 公司(理事長)
監 棚	浜崎 洋(専務理事)	岡田 義彦(専務理事)	鶴本 定義(専務理事)
事 務	栗山 正文(事務局長)	栗山 正文(事務局長)	栗山 正文(事務局長)
浅香 繁晴(総務グループリーダー)	山口 登(総務グループリーダー)	山口 登(総務グループリーダー)	山口 登(総務グループリーダー)
谷内 孝夫(総務グループ主幹)	谷内 孝夫(総務グループ主幹)	小松 孝弘(総務グループ主幹)	福島 正実(所長)
三浦 純夫(所長)	三浦 純夫(所長)	福島 正実(所長)	藤田 邦雄(調査部長)
福島 正実(調査部長)	福島 正実(調査部長)	福島 正実(調査部長)	土屋 宜雄(特定事業調査グループリーダー)
浜崎 情司(特定事業調査グループリーダー)	浜崎 情司(特定事業調査グループリーダー)	浜崎 情司(特定事業調査グループリーダー)	和田 龍介(同 専門員)
相田 龍介(同 専門員)	特定事業調査グループ		
栗山 哲史(同 嘱託調査)			

平成23年度

発掘調査の実施については、石川県教育委員会と財團法人石川県埋蔵文化財センター（以下「センター」）との間で発掘調査等業務委託契約を締結し、センターは法第92条1項の規定に基づく発掘調査届（平成23年4月12日付け財理第34号）を県教育委員会にて届出、教育長から「発掘調査届に対する通知について」（平成23年4月13日付教文第181号）を受けた。発掘調査面積は1,080m²である。

着手にあたり、4月25日に建築住宅課・文化財課・センターの3者で現地打ち合わせを実施した。

調査範囲は既存建物を境に南北2つに分かれており、発掘調査終了後に既存建物を解体する計画であった。調査は排土置き場を確保するため南側調査区を2分割(南1区・2区)して着手すること、北側調査区に残る既存構造物は南側調査区の終了見込みである6月中旬までに建築住宅課が撤去することを確認した。なお、作業用プレハブ等の作業ヤードが十分に確保できないことから、建築住宅課と調整して、既存建物の空室を使用した。作業用プレハブの設置等事前準備を経て5月中旬から現地入りし、南1区から表土除去・遺構検出を実施した。6月15日には南調査区の調査が完了し、既存構造物の撤去工事を待って27日から北調査区の表土除去に入った。北調査区はほとんど安定した地山が存在せず、旧表土層直下は氾濫による礫原で占められていた。6月30日には北調査区の調査を終了し、7月3日に現地説明会を実施した。説明会には地元住民の方々を中心に約30名の参加があった。調査区の一部埋め戻し後、7月5日に発掘機材を撤収した。

現地作業終了後、石川県教育長あてに発掘調査現地作業の完了報告（平成23年7月8日付け財理第240号）を提出し、現地調査で出土した遺物については、遺失物法第4条第1項の規定に基づき、金沢中警察署長に埋蔵物発見届（平成23年7月8日付財理第241号）を提出、金沢市教育委員会から文化財として認定された旨通知（平成23年7月11日付文保第347号）がなされた。

平成24年度

出土品整理事業を実施した。内容は出土遺物の記名・分類・接合、遺物の実測及びトレース、遺構図トレースであり、特定事業調査グループが担当した。

平成25年度

報告書作成・刊行事業を実施した。担当は特定事業調査グループである。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境



第1図 遺跡の位置

額新町遺跡は、石川県金沢市額新町地内に所在する。金沢市は、北に津幡町と海岸沿いの砂丘上に展開する内灘町、南に白山市と野々市市に隣接し、古来より加賀から能登を繋ぐ交通の要所として栄えてきた。市周辺の地形は、南東部を山地で囲まれ、北西部に犀川水系によって形成された金沢平野が広がる。平野の土壤は、東部丘陵を出自とする海成堆積物を中心としたシルト層が河川の影響によって表層に堆積しており、高い保濕性を有する。市南部は、手取川によって形成された扇状地形である手取川扇状地の扇央～扇端部に立地する。扇状地は更新世末期に形成された扇状地礫層に覆われ、本遺跡においても礫層の一部を見ることができる。遺跡は市内を流れる高橋川の西側に位置し、2011年に市政へ移行した野々市市と接する。1954年、旧額村（額谷・大額・額乙丸・額新保）の金沢市編入後、市中心街に近いなどの利便性からベッドタウン化の進行、住宅街の展開により、新たに地区名として「額新町」が成立、現在に至る。

第2節 歴史的環境

手取川扇状地に立地する遺跡は、扇央部と扇端部に大別ができ、時代・時期によって増減を示す。縄文時代の遺跡は、後期から扇端部付近にみられ、御経塚遺跡をはじめとする新保チカモリ遺跡や中屋遺跡、米泉遺跡などの中核となる大集落が長期間にわたって営まれている。晚期になると扇央部への進出が顕著となり、額新町遺跡と近接する馬替遺跡(13)や南西の打製石器を作成していた野々市市粟田遺跡(7)が確認されている。本遺跡の既往の調査においても晚期の八日市新保式の浅鉢や下野式の壺形土器や粗製深鉢と打製石斧などの石器が出土しており、当該期の生業圏内であったことが想像される。

弥生時代初頭の遺跡は、県内でもその数が減少しており、九州系土器の出土した栗田遺跡(7)など的一部で報告されている。前期になると扇央部では上林遺跡や末松遺跡、乾遺跡など、扇端部では御経塚遺跡や押野タチナカ遺跡、三日市A遺跡などが確認されている。後期後半になると、確認されている遺跡数は増加傾向にある。

古墳時代初頭から前期にかけての遺跡は扇央部では少例であり、扇端部でみられる。これらの扇端部の遺跡は元々、大規模集落が近接もしくは同地点にあることから、先の時代からの継続した集落と



番号	遺跡番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡番号	遺跡名	種別	時代
1	105100	額新町遺跡	集落	縄文弥生、古墳、古代、中世	15	105600	高尾公園遺跡	集落	古代
2	1203800	三林館跡	城館	中世	16	105700	高尾イシナ塚古墳	古墳	古墳
3	1203900	藤田ナカシンギン遺跡	集落	弥生、古代、中世	17	106900	対面跡	散布地	古墳、中世
4	1204000	三納トイハダゴシ遺跡	集落	縄文、古代、中世	18	106300	高尾新マトバ遺跡	散布地	古代
5	1204200	三納ニシヨサ遺跡	集落	縄文、弥生、中世	19	106200	高尾新町遺跡	散布地	古代
6	1204100	三納アラミヤ遺跡	集落	縄文、古代、中世	20	106100	高尾天神堂遺跡	散布地、集落	古代
7	1204300	栗田遺跡	集落	縄文、古代、中世	21	105800	高尾A遺跡	散布地	古代
8	1203000	當野館跡	城館	縄文、古代、近世	22	105900	高尾C遺跡	散布地	弥生、古墳
9	1202900	皆原キツヤケ遺跡	集落	中世、近世	23	106000	高尾B遺跡	散布地	古代
10	1203100	扇田ガヤラダ遺跡	集落	古代、中世	24	106400	高尾城跡	城館	中世
11	105400	扇ヶ丘ハワイゴク遺跡	集落	縄文、弥生、古代、中世	25	106500	駒ヶ橋穴群	横穴墓	古墳
12	1203300	扇台遺跡	集落	弥生、古代	26	106600	高雄山寺遺跡	散布地	古代
13	105500	馬替遺跡	集落	縄文、古代、中世	27	106800	高尾じょうざぶらう横穴	横穴墓	古墳
14	105200	大瓶キヨウデン遺跡	散布地、集落	古代、近世	28	106700	高尾古墳	古墳	古墳

第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1/25,000)

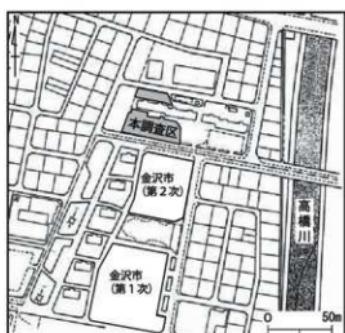
される。金沢市教育委員会がおこなった本遺跡の第1次調査では、当該期である古府クルビ式期の集落が確認されている。本遺跡東の丘陵上には高尾イシナ塚古墳(16)や高尾古墳(28)が築かれ、御経塚・シンドン古墳群などの古墳群も見られる。また終末期古墳として高尾じょうざぶろう横穴(28)も見られる。

古代は、これまでの遺跡数の増加と扇端部への展開が、7世紀末には一旦減少傾向を示し、扇央部に集中していく。8世紀に入ると扇央部を中心に遺跡数が増加し、8世紀後半以降の莊園関連遺跡の増加をみることができる。扇央部では大型掘立柱建物が確認された三浦遺跡や幸明遺跡での開発は、次第に停滞期を迎える。9世紀後半まで続いている。

中世は、当地に本拠を構えた有力国人層の富樫氏や富豪層の存在を示す遺構や遺物が確認されている。富樫氏の館跡とされる富樫館跡(8)や加賀地域でも最大級の掘立柱建物が確認された扇が丘ハワイゴク遺跡(11)などがあげられよう。また二日市A遺跡では大きな掘削や多数の井戸を持つ館跡と五輪塔が出土した方形台状の墓域が確認され、有力者の存在が想定される。

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法



第3図 調査区の位置と既往の調査

事業地内で行われた分布調査では、地表面下30~50cmで暗~黒褐色土の旧表土が確認され、その約30cm下で基盤層となる黄灰褐色粘質土が見られた。一方で東側は30cm以上の地形の下がりが認められ、遺跡は西側に拡がるものと判断されている。本調査の南側では金沢市教育委員会により2度の発掘調査が実施されているが、第2次調査区では希薄な状態が見られたことや、分布調査でもわずかな遺構・遺物しか確認できなかったことから、本調査範囲は額新町遺跡の北縁部にあたるものと予想された。

調査区は既存建物を挟み北区・南区に分けられ、南区は作業ヤードの関係で切り返し調査を実施したため東半の南1区・西半の南2区と調査時を呼称している。

第2節 層序

調査地は住宅街であるが、分布調査では盛土下に以前の耕作土が確認できた。基本層序は土層図(第4図)のとおり5層に分けられる。第1層は現表土(盛土+旧耕作土)、第2・4層暗褐色土は漸移層と思われ、第2層は西側では削平されていた。第3層黒褐色土は旧表土で、遺物はほとんど含まれない。厚いところでは40cm以上の堆積を確認した。第5層黄褐色~黄灰粘質土は南調査区の基盤層となるが、調査区北側~北調査区ではほぼ消失している。第7・8層は灰ないし褐色砂礫層で、手取川扇状砂礫層と見なされる。拳大の亜円礫中に灰色粗砂が混じり、南調査区北側~北調査区ではこの層が基盤層となる。

第3節 遺構と遺物

1. 概要

確認された遺構はほぼ南区の南半に偏り、北区では明確な時期の分かれる遺構は確認できていない。調査中に遺構として掘り下げた小穴中にも植栽痕と思われるものが多く、また調査範囲全域で遺物がほとんど出土せず、本調査範囲が遺跡の北縁部にあたる証左といえよう。出土した遺物は古代須恵器、土師器小片、陶磁器小片、縄文時代の打製石斧であり、遺跡の時代は古代が中心と考えられる。

2. 掘立柱建物

SX1 南1区南東端に位置する。2×2間の総柱建物で、SX1を切りこむ。建物規模は、桁行3.7m、梁行3.2m、面積14m²を測る南北にやや長い建物で、南北軸から東に5度傾く。P10、P11、P22を北側梁間柱列、P2、P3、P4を南側梁間柱列、P10、P6、P2を東側桁行柱列、P4、P8、P11を西側桁行柱列とする。柱穴の規模は、検出面上で長径76～120cm、短径68～120cmの略円形を呈し、柱筋の通りがやや歪む。比較的直線状に配置する西側桁行柱列に対して、梁間中央の柱穴P3とP6、P22は若干外反している。南側にさらに柱穴が展開する可能性は否定できないが、北及び東西には柱穴がなく梁行がこの規模とすれば桁行がこれ以上伸びるような建物は想定しにくい。梁・桁行柱穴と東柱穴が規模をほぼ同じくすることから、総柱建物と判断した。遺物は土師器微細片が柱穴覆土内から出土しているが、時期の特定には至らない。

南区ではこの他にも柱穴の可能性のある小穴を確認しているが、建物の復元には至らなかった。

3. その他の遺構

風倒木痕SX1 南1区南東端で、掘立柱建物SB1に切られる形で検出した。検出面では不整梢円形を呈し、黒褐色土が環状に回り、中に地山質土が堆積していた。覆土は変則的で黒褐色土と地山質土が逆転層を形成しており、風倒木痕と判断した。

SX2 南2区北西端で検出した。遺物は近世陶磁器の細片が出土している。倒木痕の可能性がある。

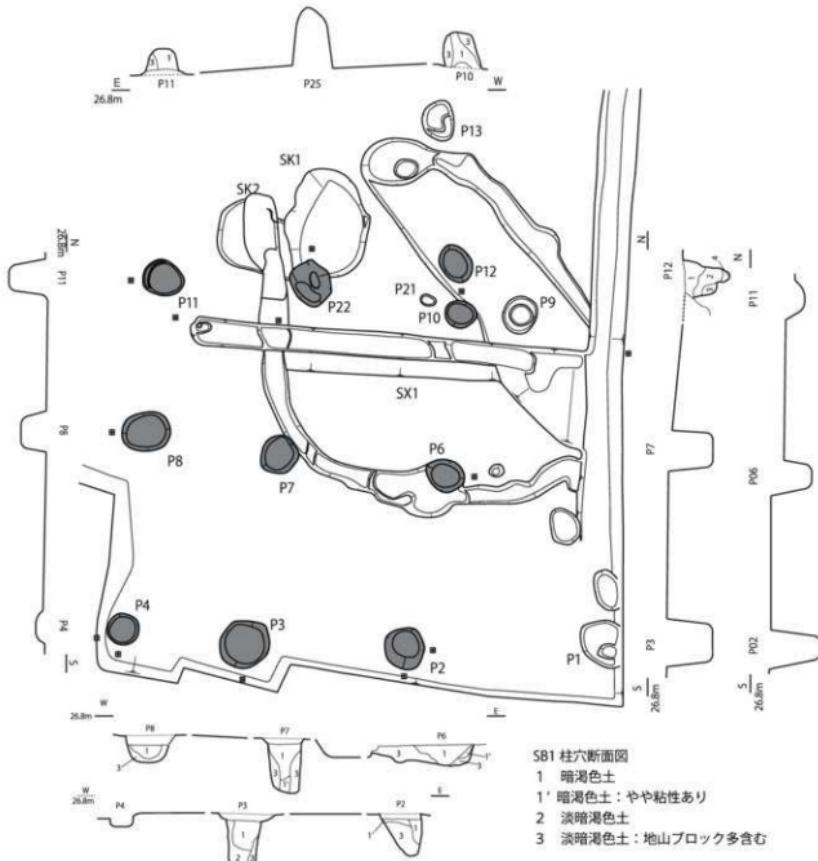
SK1・2 風倒木痕SX1を切る形で検出した。土層は4層に分層でき、いずれの層にも地山質覆土を有しており、上記のSX01のような倒木痕の可能性がある。遺物はSK01より土師質の細片が出土しているが、時期の特定に至っていない。

小穴群 覆土は、暗褐色土と黒褐色土を主体として、一部で地山質覆土が含まれる。遺物も僅かに出土しているが、小細片であるために、時期の特定に至らなかった。

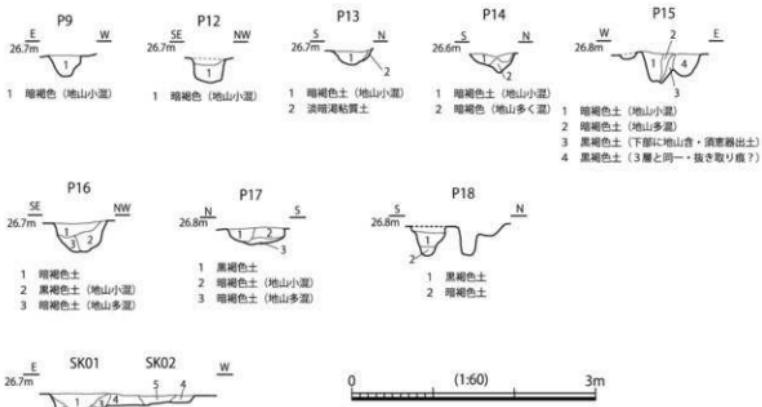
4. 遺物

出土した土器の多くが細片であり、土師器小片が目立つが時期を特定できない。図化できた資料は4点で、全て南区からの出土である。1は南1区遺構検出時に出土の須恵器壺で胎土は細かく、長石や黒色砂粒を含む。焼成は良好である。推定口径11.5cm。2は南1区P15出土須恵器壺、有台壺か。口唇部が若干外転する小型品で、9世紀代に位置づけられよう。内・外面をロクロナデで調整する。胎土は粗砂・長石を含み、焼成は良好である。推定口径10.6cm。須恵器2点は胎土から金沢市末塙跡産と推定される。

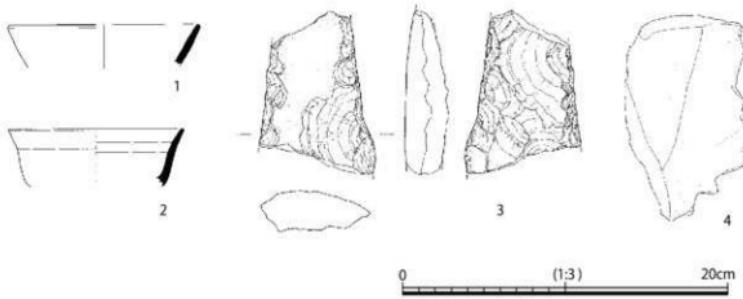
石器は2点が出土した。帰属時期は不明であるが、第1・2次調査や周辺の遺跡の立地から推定すると縄文時代晩期の所産と考えられる。3は打製石斧、細粒砂岩を石材として、刃部と基端が欠損している。残存長10.1cm、最大幅7.2cm、最大厚2.7cm、重量198g。4は大型剣片で石材は流紋岩。



第5図 南区 SB1、風倒木痕 SX1 (S=1/60)



第6図 その他造構断面図 (S=1/60)



第7図 出土遺物実測図 (S=1/3)

第4章 総括

額新町遺跡は、今回の県による調査の他に、金沢市教育委員会による3度の調査が実施されている。本調査と同じ年には金沢市により1次調査区の南側で調査が行われており、それらを含めて額新町遺跡の状況についてまとめてみたい。

額新町遺跡の初現は縄文時代晚期（八日市新保式期）に認められるが、遺物も少量であり、明確な遺構も未検出である。当時における集落の主体は北側や南西側に位置する馬替遺跡や粟田遺跡と考えられる。弥生時代は、金沢市第2次調査の自然河川跡のみが確認されており、遺物も自然石と混在した状況で出土しており、上流域からの流れ込みが想定される。河川跡は金沢市第1次調査区の溝SD01の続きとされ、本調査でも期待されたが、東側の調査区外へ流れいくものと予想される。

古墳時代は、本格的な集落の形成時期と見ることができる。遺構は竪穴住居9棟、掘立柱建物1棟が確認され、扇尖部では稀な古府クルビ式期の土器が出土した。この時期の集落は、多くが扇端部に展開しており、扇尖部である本遺跡で集落の形成がみられるのは特徴的といえよう。古代は、それぞれの調査で遺構・遺物が確認された時代である。本調査では2間×2間の竪柱建物1棟、第2次調査では掘立柱建物3棟以上、第1次調査でも3棟の掘立柱建物を確認している。第2次調査の掘立柱建物柱穴遺物から10世紀後半代の年代観が導かれているが、本調査で出土した須恵器は9世紀代のものであり、掘立柱建物のまとまりから考えると散発的に営まれたものであろう。中世は、性格不明の溝とその時期の遺物が第2次調査区の西側で確認されている。

今後、遺跡の範囲が拡大する可能性もあるが、額新町遺跡の主体となる時代は古墳時代と古代の2時期がある。前後の時代・時期でもわずかに資料が得られているため、相密はあるものの遺跡は断続して営まれていたと考えられる。

参考文献

- 山本直人・吉田 淳 2006 「扇状地のあけぼの」[野々市町史 通史編]
- 金沢市教育委員会 1995 「金沢市額新町遺跡」
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2000 「額新町遺跡」([金沢市内道路発掘調査報告書] I)
- 同2012 「石川県金沢市 額新町遺跡Ⅲ」



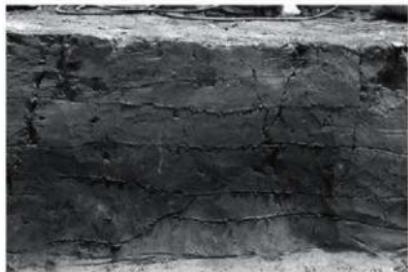
額新町遺跡空中写真（南1区調査完了時）



南1区 遺構検出状況（東から）



南2区 遺構検出状況（東から）



標準土層（南1区北壁）



南1区 風倒木痕 SX1



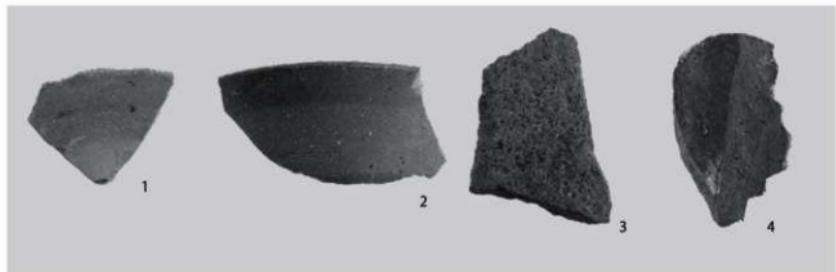
南1区 挖立柱建物 SB1 (北から)



北区 完掘状況 (東から)



現地説明会の様子



遺物写真

報 告 書 抄 錄

金沢市 額新町遺跡

発行日 平成26(2014)年3月31日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8575 石川県金沢市輪見町1丁目1番地
電話 076-225-1842(文化財課)

公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
〒920-1336 石川県金沢市中河町18番地1
電話 076-229-4477
E-mail mail@ishikawa-maibun.or.jp

印 刷 株式会社 中川印刷